様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 21 日現在

機関番号：32663
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：21530981
研究課題名（和文）　中等学校教育における総合芸術教育プログラム：「美的教育」ワークショップ
研究課題名（英文）　The Educational Program of the Arts Synthesis In Secondary School:The “Aesthetic Education Workshop” Teaching Method
研究代表者
桂　直美（KATSURA NAOMI）
東洋大学・文学部・教授
研究者番号：50225603

研究成果の概要（和文）：本研究は、「美的教育」の先駆的な実践である米国リンカーンセンターのプログラムに学び、学校教育の授業のためのカリキュラム開発を行うことを通して、「美的教育」に固有の「ワークショップ授業法」の意義と特徴を明らかにしようとした。一つの芸術作品に忠実にありつつも、鑑賞者に固有の探究を保証しようとする「美的教育ワークショップ」は、学習者と指導者としての批評家を連続的に捉え、鑑識眼の深化という点において学び手と教え手の双方において成長を見る授業モデルとして再定義された。

研究成果の概要（英文）：This study aims at emphasizing the significance and the characteristics that are unique to the “Aesthetic Education Workshop”, by developing the curriculum for the Japanese school class work, as demonstrated by the Lincoln Center Institute “Aesthetic Education Workshop”.

The workshop method is re-defined as a teaching-learning model which, in the collaborative inquiry that is unique to both the individual learner and to the art work, involves both the learners and the critic/teacher, and brings them an extensive understanding of the specific art work and, most importantly, a deeper connoisseurship.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：美的教育、カリキュラム、ワークショップ、鑑識眼

１．研究開始当初の背景

日本の学校教育における芸術は、その草創

期から、内容の変遷はあっても、音楽科と美術科教育が独立の教科教育として位置づけられ、それぞれ音楽、美術の専門家の領域を背景として存立し、芸術へのアプローチを担うものと位置づけられてきた。そのため他の芸術表現領域が視野に入らないばかりではなく、個別の実技を習う時間という共通理解が生じ、実技のさらに向こうにある「芸術表現」へのアプローチよりも、目に見えやすく触知可能な制作物や活動（パフォーマンス）によって教育のプロセスや結果を捉えがちであったと言える。芸術作品を芸術として理解することや、より深い理解に基づいた自らの表現という、芸術教育としての方向性を実現し得ないまま、「芸術への教育」は、学校外のより専門的な習い事や教室に任され、学校では芸術性の高いものを難しいと敬遠し、より大衆的な音楽や美術、すべての子どもに楽しみと満足を与えることのできる、活動型の授業があれば良い考えられがちであったといえる。

こうした教科教育の問題点に対して、改訂学習指導要領における「共通事項」や批評的な言語の使用などが、芸術教育領域において着目されるようになってきた。その背景には戦後米国の「美的教育」カリキュラム研究からもたらされた知見がある。申請者（桂）もこれまでに、子どもの美的感受性の教育として一つの芸術作品を表現的にしている特徴的な表現要素に焦点を当てる「美的教育」論とカリキュラムに着目してきた。カリキュラム研究における経験主義から学問中心主義への転換が唱えられた教育研究思潮を受けて、総合芸術教育アプローチの意義を明らかにしたのが７０年代の「美的教育」論であった。その貢献としては、デューイの芸術哲学に共鳴しながら、日常の見慣れた光景や事物の中にも新たな側面や性質を開示するという「すべての人にとっての」芸術の意義を捉え、美的鑑賞における芸術作品の構成要素に着目した教育方法やカリキュラムを開発し、芸術における美的経験の教育可能性を強調したことがあげられる。しかしながら、カリキュラム開発にかかわる一連の研究は、よく準備された教材と評価用具の開発に傾斜した結果、美的教育哲学において展開された理想と乖離したものに終わってしまったといえる。

それとは極めて異なる実践スタイルで芸術の本質に忠実な万人のための教育を実現しようとしているのが、リンカーンセンターインスティテュート（以下、ＬＣＩと略記）の「美的教育」であり、その理論的基礎となっているのがグリーンの哲学である。グリーンは、デューイの哲学に共鳴しながら、芸術作品を、見る者とその対象作品との間の継続的な相互作用の中で成就されるものと見なした。またそれゆえ、予め設定される到達目標や、知識や「善さ」を教師が子どもに伝えるという近代学校教育制度に埋め込まれた概念システムに閉じない教育を追求した。そのために、ＬＣＩのカリキュラムは、ワークショップ教授法に基づいて、カリキュラムを徹底して創発的なものと性格づけ、カリキュラムや目標の標準化を斥け、一つの芸術作品への深い焦点化や、批評家としての授業者の役割や、学びの時空間の拡大などを追求するものとなっている。

２．研究の目的

本研究では、申請者がこれまでに取り組んできた「美的教育」に関する研究と、ワークショップ授業法に関する研究を踏まえ、学校教育外で開発・実践されてきたＬＣＩの教育プログラムにおける芸術作品への深い理解や、学習者に固有の美的経験の実現をプロト

タイプとして、それが日本の学校教育の枠組みの中でどのように行われ得るかをアクションリサーチを通して探り、その時の授業者の役割やカリキュラム構成がどのように捉え直されるのかを明らかにすることを意図した。

ＬＣＩのカリキュラムは、アーティストが芸術に向き合う美的経験や芸術の本質に忠実に、子どもの学びを構成しようとする。それゆえに学習に先立って到達目標が決定されたり、目標に照らして生徒の達成を個別に測定する評価システムは斥けられる。このような「美的教育」を、近代学校のカリキュラムの中に融合していくことはどのようにして可能になるかを明らかにするためには、核となる芸術作品がどのように選ばれ、多様な芸術表現形式がいかにして関連づけられていくのか、アーティストと教師の協働をどのように計画し、子どもの成長と学びをいかにして評価し、次のカリキュラムの展開へとつなげていくのか、その時教師の判断の根拠となるものは何か、子どもの芸術性の深化や教師自身の成長はどのように現れるかといった実践的問題が、明確にされなくてはならない。

第二に、「美的教育」に固有のワークショップの特徴と、その時の教師の役割はどのようなものであるのかが明らかにされなくてはならない。

第三に、アクションリサーチの結果に基づいて、美的教育における「ワークショップ」という教育実践の方法原理を分析的に整理すると同時に、学び手の協同探究を成立させる実践者（ティーチングアーティスト）の役割を定式化する。とりわけ、この教育方法を学校教育の文脈に導入する時の、実践者の持つ鑑識眼や言語行為の意味を、デューイ等の芸術哲学を参照しながら再評価することを目ざした。

３．研究の方法

第一に、現在ＬＣＩで現職教員を対象に試みられているワークショップ実践を参加観察とインタビューを通して検討する。活動の実際については、社会構成主義的なパラダイムに立つアイスナーの「教育的鑑識眼と教育批評」の方法を援用し、記述と解釈、評価を行う。また、日本の学校教育の文脈でのワークショップの可能性を検討する前提として、ＬＣＩのティーチングアーティストを招聘して、東京でのアート資源と学校環境でのワークショップを実施し、同様に検討する。

第二に、「美的教育ワークショップ」を日本の中等学校に適した形に翻案し、その実践をとおして、日本の学校教育の文脈で求められる「美的教育」の条件と、ワークショップ授業法による芸術教育の意義を実践的に明らかにすることを目ざす。このワークショップを担当するティーチングアーティストに取材し、このワークショップの準備過程に焦点を当て、またティーチングアーティストのワークショップ実施後の半構造化インタビューの分析を用いて検討する。

第三に、教育活動としてのワークショップの実施に先立って教師との共同研究として行われる「準備ワークショップ」の構成過程を研究する。芸術作品の選定に始まって、ワークショップの全過程を念頭に協議を継続的に行うこのプロセスにおいて、アーティスト達が最も重視しているものは何か、ワークショップの参加者たちに投げかける問いが、いつどのように生成するかといった視点から分析する。

第四に、アクションリサーチの結果を踏まえて、デューイやグリーン、アイスナー等の理論と併せて考察することをとおして、ＬＣ

Ｉ「美的教育」に固有の「ワークショップ」の授業原理を明確にする。

４．研究成果

（1）ＬＣＩ「美的教育」プログラムに固有のワークショップの特徴

ＬＣＩが現職教員を対象として「美的教育」の授業の普及のために行っているワークショップの中から、音楽と美術を主要な構成要素としているものを選んで、参加観察を行い分析した。一連の活動の中で、美術作品を核とした部分と音楽作品を核として行われる部分とを比較し、その中で、ティーチングアーティストから出される「問い」と作品の関係、学習者による構成的活動と作品との関係を視点としてワークショップを検討したことから、美術と音楽のワークショップの性格の違い、とりわけ音楽作品にかかわるワークショップを巡って、パフォーマーの視点から構成されるワークショップの難しさが明らかになった。

ワークショップにおける言語的な活動の中心にある「問い」を産み出すプロセスについては、経験的に語られているのみであり、これまで十分な研究がなされているとはいえなかったが、2010 年東京において、前ＬＣＩティーチングアーティストのＪ．ジェームズ氏を招聘して美術作品をテーマとしたワークショップを実施し、参加観察をとおして、中心となる「問い」がどのように生成されるかに焦点をあてて分析した。「探究の道筋」と呼ばれるこの問いは、答えが決まっていないオープンクエスチョンであり、かつその作品に固有の特徴を探究できるような問いでなくてはならないものであること、またこのワークショップにおいては、授業者自身が参加者と共に作品に向かう中で新たな見方を持ち、それを問いの形に変換することによって学習者の探究する行為を引きだそうと意図していることがわかった。

さらに実際のワークショップは、答えの決まらないオープンな問いに導かれることで、授業者と学び手に固有な言語表現行為を要求するものとなっていた。また当該の一つの作品に固有な問いによって深く作品を経験するという点に生徒の成長を見るのであり、鑑賞を主体とする活動であるが、学習者を創作家の立場に立たせることが重要な原理となっていることが示された。こうしたカリキュラムのあり方は、個人によって多様な見方が存在し、かつ見るたびに新たに経験されるものとしての芸術作品の特性が必然的に要求するものであるといえる。

（2）日本の学校教育プログラムへの翻案

日本の学校環境で実施可能な、現代音楽作品を核としたワークショップのデザインを行った。原プランを、大学院生を対象として試行を行い、音楽作品によるワークショップにおいて必要な変更点について示唆を得た。

次にアクションリサーチとしてのワークショップ型授業を LCＩティーチングアシスタントとの協働でプラニングし、筑波大学附属小学校、附属中学校において実施した。「探究の道筋」とは決して出来合いの問いではなく、授業をする学校教師との協働によって生まれた問いであり、それゆえにその問いを持つことによって、教師自身のエキスパート性による導きを否定せずに、同時に芸術作品に対する学び手の個性的なアプローチを引き出す授業が実現できることが示された。

（3）「美的教育」における「ワークショップ」の授業原理の探究

前ＬＣＩティーチングアーティストのワークショップの分析から、ワークショップ実践者の「鑑識眼」と「批評」が、ワークショップを構成する方法原理であると同時に、学習者にとっての学びの目的・目標となること

が示された。実践家であるティーチングアーティストは、当該の作品に対する自身の経験を学習者による鑑賞経験に対する「先行経験」と位置づけることで、学習者と実践家とが共に探究的に作品に向かう場としてワークショップを再構成していると言うことができる。そこでは、実践者自身が学び手と共に新たな見方の創出を試みており、それが近代学校教育に典型的な教師-生徒の関係とは異なる関係性をもたらしていること、またそのことが学習者の学びを起動する要因となっていることが明らかになった。ワークショップは、学び手の協同言語行為としての批評の生成と共有を目ざし、その中で学び手自身の鑑識眼が形成されていくプロセスとして、授業の場を再構築することを可能にするのである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　5 件）

① 桂直美、「美的教育」ワークショップの学校教育における展開―創作と鑑賞の相互作用―、東洋大学文学部研究紀要、65巻、2012年３月、pp17-25、査読無

② 桂直美、リンカーンセンターインスティテュートの「美的教育」カリキュラム構成過程　―芸術教育における「問い」の意味―、『東洋大学文学部研究紀要（教育科学）』第64巻 、2011年2月、pp.207-215、査読無

③ 桂直美、「ワークショップ授業モデル」による表現の授業構成―「鑑識眼と批評」による授業パラダイムの転換―、『教育方法学研究』、日本教育方法学会、第３５巻、2010年３月、pp.69-70、査読有

〔学会発表〕（計 3 件）

①桂直美、教育実践研究における「批評と鑑識眼」の意義―E･アイスナーの「教育的鑑識眼と教育批評」の検討を通して―、日本デューイ学会第55回研究大会、2011年10月２日、関西学院大学

②KATSURA, N.　An Emerging Alternative Teaching-Learning Framework for Arts Education in a School Setting, Drawing on “Connoisseurship and Criticism”: The Creative Workshop as a Model for Class Work, Annual meeting of the American Educational Research Association、2011 年 4 月 12 日、New Orleans

６．研究組織

(1)研究代表者

桂　直美（KATSURA NAOMI）
東洋大学・文学部・教授
研究者番号：50225603

(2)研究分担者

荒尾　岳児　（ARAO GAKUJI）
東京音楽大学・音楽学部・准教授
研究者番号：10378284

(3)連携協力者（0）

(4)研究協力者

北澤　敏之（KITAZAWA TOSHIYUKI）
東洋大学・文学部・准教授
研究者番号：70553741
James, Jerry（JAMES JERRY）
The Lincoln Center Institute・Center for Arts Education・Director of Teaching and Learning